



シーズ名

情報の歴史から将来を展望する

氏名・所属・役職

塩谷昌史 ・ 経済学部 ・ 准教授

<概要>

近年、欧米先進諸国では近代からポスト近代への移行が生じている。情報収集の側面から考えると、近代国家が官僚制度を通じてデータを収集し、各種の統計文書にまとめていた時代から、民間を含めた様々な組織が、インターネットを通じて膨大な情報を収集し、それぞれの組織の目的に沿って編集し始める時代に移りつつある。

私は19世紀～20世紀のロシア経済史を専門とし、上記の問題意識から、近代国家の統計制度がどのように形成されてきたかについて、ロシア内務省・中央統計委員会の活動を、欧米諸国の統計制度の整備過程と比較することを通じて、近代国家の情報収集の特質を明らかにし、今後の情報収集の将来を展望しようとしている。

近代に情報収集において、卓越していたのは国家であった。しかし、近年グーグル等のグローバル企業が情報収集において、国家を凌ごうとしている。国内外において正確な情報を持つ組織は、同時に権力を持つ。国家を上回る民間組織の登場は、従来の近代国家の情報収集システムをどのように変えるかを研究している。

<アピールポイント>

将来を考える際、これまでの人類の営みを顧みる必要がある。私は現在、「知性の歴史」(intellectual history)に取り組んでおり、人類が情報や知識をどのように収集し、利用してきたかを研究している。情報や知識の本質を追及される企業には、何らかの形で貢献できます。

<利用・用途・応用分野>

知識や情報を基に新しいシステムを構築される際、私の研究を応用できると思います。

<関連する知的財産権>

特にありません。

<関連するURL>

<https://www.econ.osaka-cu.ac.jp/ja/staff/masachika-shiotani/>

<他分野に求めるニーズ>

特にありません。

キーワード

知識、情報、統計制度、ロシア、近代国家